

「新島八重と日本の価値観」

平成三十年十一月十八日（日）

今村 忠男

はじめに】

世界の人々の行いは往々にして国々の利害得失が絡み合って、その流れが決められています。昨今の日本もそれに漏れず、個人主義や自由の名のもとに、他人のことは考えず、自分さえ良ければいいという風潮になってきており、今や私たち日本人の昔からある価値観を忘れ去っているように思われます。けれども私たちの先人たちは、根っこの部分では、我欲を制御し、日本人の生き方はこうであって欲しい、国の形はこうあらねばならないという純粋な価値観をつくってきました。

その価値観に基づいた国づくりの中心に天皇は位置づけられていますが、近代日本の開始といってもよい明治維新で、文字通り、日本の国柄と価値観を誠実に実践した会津藩。その中の新島八重を通して、「日本人の生き方」を見ていきたいと思います。



新島 八重

新島八重について】

幼年期及び少女期の八重については、ほとんど記録がありませんが、「元来私は子供の時から男子の真似が好きで、十三歳の時に米四斗俵（約 10 kg）を自由に四回まで肩に上げ下げをした。又、石投げは男並みにやっていました」とあります。幼い頃から藩の砲術師範の父や兄の側で最も進んだ砲術及び実践の在り方についてごく自然に学びつつ育ちました。

八重の母佐久も、聡明な人物と伝えられており、兄覚馬は八重が生まれる以前より母佐久から多くの教育を学んだと伝えられています。その一例が、「決して自分からは仕掛けるな。けれども先方から争いを挑まれた場合には飽くまで対抗し、単に自ら守るばかりでなく、進んで勝利を得なければならぬ」と。男勝りで物怖じしない八重の性格はこうした状況で育まれたといえるのではないのでしょうか。

世の中が攘夷勤皇から討幕、明治維新へて転換する騒然とした時代でした。そんな中、会津の人々の運命を左右する戊辰戦争が始まったのです。八重の弟三郎は鳥羽伏見の戦いで負傷し、江戸の会津藩に運び込まれましたが、そこで息絶えてしまいました。一方覚馬は捕えられ、京都薩摩邸に幽閉されます。山本家には、覚馬は処刑されたと伝えられたようです。

注) 戊辰戦争

王政復古を経て明治政府を樹立した薩摩藩・長州藩・土佐藩らの中核とした新政府軍と、旧幕府勢力および奥羽越列藩同盟が戦った日本の内戦。名称は慶応 4 年/明治元年の干支が戊辰であることに由来する。明治新政府が同戦争に勝利し、国内に他の交戦団体が消滅したことにより、列強が条約による内戦への局外中立を解除し、これ以降、同政府が日本を統治する合法政府として国際的に認められることとなった。

四月に江戸城無血の開城がされてから四ヶ月後の八月二十三日早朝、若松城の入城をうながす割場の鐘が激しく打ち鳴らされました。鐘が打ち鳴らされるとき、十五歳以上六十歳未満の者は即入城するのが藩の決まりごとでしたが、すでに藩士の家には留守を預かる婦女子しかいませんでした。このとき彼女たちに残された選択肢は三つでした。ひとつは、一家全員が城に入って玉碎覚悟で最後まで戦うこと。女子も炊事や看護など後方支援の大切な役割があります。二つ目は、多くが籠城すれば戦闘の足手まといになり、兵糧を減らすので潔く自刃するという道でした。残る三つ目は、郊外に避難して生き延び、戦地で戦う父や夫の音沙汰を待つというものです。いかなる選択をしても武士道精神に反するものではありません。それぞれの置かれた立場において判断すれば良いのです。山本家を預かる母佐久は足手まといになってはいけなから避難するという意見でした。しかし、八重は入城して戦い抜く覚悟でした。そのため、母佐久が折れ全員で入城することに決めまし

たと言われていました。

八重は第三郎の形見の袴姿で大小の刀を差し、最新式のスペンサー銃と散弾袋を担いで城に入ったのです。この時の心境を、「私は弟の仇を取らねばならぬ。私は即ち三郎だという心持で、その形見の装束を着て、一は主君のため、一は弟のため、今の限り戦う決心で城に入りましたのでございます」と。戦力不足の城に入るや、八重はスペンサー銃の弾がなくなるまで戦いました。



スペンサー銃

しかし、戦況は日を追って悪化していきました。そこには、子供や女たちが自ら戦争に参加しようとしていた様子などを次のように語っています。「十一・二歳の子供等十人ばかり、何れも手頃の長さに切りつめたる槍を携え、是非、夜討に私共を同行をと頼みますので、私もこんな子供も君のために命を捨てる覚悟かと思ひ暗涙しました」。「開城の少し前に、七歳の子供が、煙硝庫の破裂した時に、もはや落城と思つて母親と共に切腹いたしました、まことに立派な死に様でございました」と。

そして、ついに降伏をします。開城後、婦女子と老人は「お構いなし」となり、八重らは奉公人の実家に身を寄せました。その後、兄覚馬が生きることがわかり、京都に移ることにしました。

京都で覚馬に導かれ、「女紅場（女子校）」助教授として教壇に立ち活躍し、いち早く英語を学びモダンレディーへと変身し、アメリカ帰りの襄と出会い、京都で初めて洗礼を受け、結婚に至りました。その結婚生活も襄の死で十四年間という短い間でした。襄の死後、キリスト教徒でもあり襄の遺志を受け継ぎ、社会奉仕活動に身を転じます。日本赤十字社に入り、災害救護活動や日清・日露戦争に篤志看護婦として従軍していました。

晩年八重は、心の友となった建仁寺管長の竹田黙雷との交流がひとつの事件となりまし

た。それは、説法の日足を運び続けていたことです。この際、「キリスト教徒だからといって、他宗教の教を聞いてはいけないという道理はない」と述べています。これらは、「公のために生きる」「弱者のために生きる」という、武士道精神やキリスト教精神が行動の源となり、愛と正義の道を歩んだと思います。八重は、新時代の価値観を受け入れながら、その最も深いところでは会津人であり続けていたと言うことでしょう。このように八重の根底には、会津の教が影響したといえます。



新島 襄

人づくり】

「国家は人なり」と言います。いつの時代にあっても人が土台です。人を育てるのが教育ですから教育こそ国造りの基本です。先人たちは、皆そのことを認識していて各藩とも優れた人材を育成するために教育に力を入れていました。世に知られた藩としては、庄内藩の致道館、水戸藩の弘道館、熊本藩の時習館などがあります。会津藩では、「日新館」を開いています。

日新館での教育は、まず人間教育を最重要視していました。それを定めたのが根本的な道徳である「六行」でした。文字通り、生徒が実践するべき六つの行いで、孝悌・忠信・篤実という徳目を反映しています。

六行)

- 一． 親は自分の本、自分は親の枝である。よく父母に仕えて力を尽くし、孝道にはげむこと。
- 一． 弟は兄を敬い、兄は弟を愛し思いやること。
- 一． わが身を愛するように家族や親族と親しみ、和睦を大切にすること。
- 一． 外観に至るまで親しみ、自分の本であることを忘れないこと。
- 一． 人に信頼され、任されたことを責任を持って滞りなく行える人であること。

- 一、親族や友人が災厄や病気、貧窮などで困ったときは、自分の身にふりかかったことと思って救ってあげること。



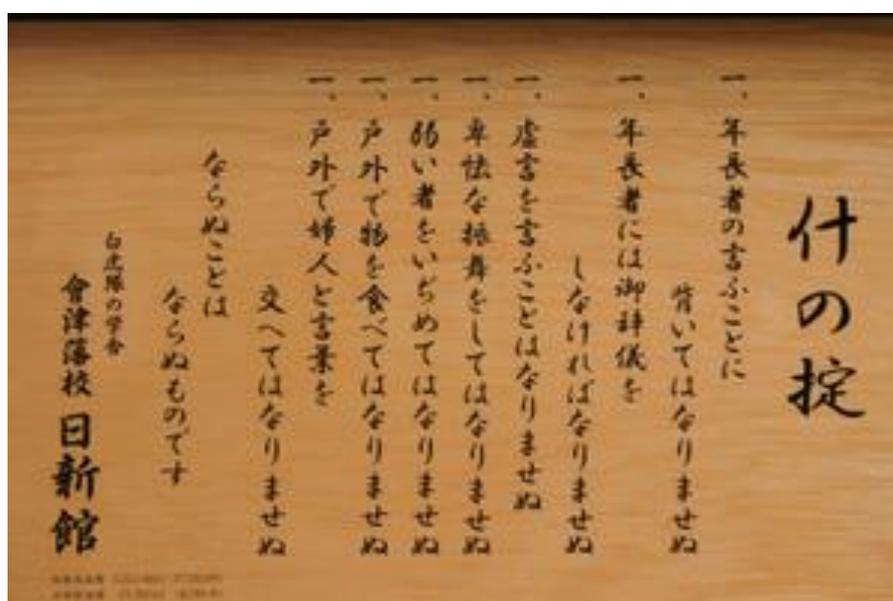
日新館

日新館教育のもうひとつの大事な柱は、学習規則としての「令条」でした。「十歳で入学し定めに従って句読を受け筆道および諸礼を兼ね習い、望みに従って雅楽を学ぶべし」、「十三歳より算術を学ぶべし」など、具体的に示されています。武士の子たちは、十歳で入学すると、まず素読所に入り漢文の素読を習います。教科書は四書五経で、藩士の子弟たちは試験によって厳しく試されていきました。それぞれの家格によって、達成しなければならない等級が決められており、地位にふさわしい教養を身に着けなければならない仕組みでした。

素読が基本となりますが、暗唱できるまで何度も繰り返し読みます。暗唱できるほどになれば、自然に内容も身につくという考え方でした。ただ、読めるようになっても内容を理解したり、それを武士としての生き方の基本として実践できるようになるには時間がかかります。そこで、幼い生徒たちでも身に付けることができるように、わかりやすい教科書として「日新館童子訓」をつくったのです。上下二巻からなる長いものですが、内容は修身で人間として生きるための基本となるものです。父母への恩、君主への恩、年長者への恩、という三つの大恩をまず教えます。八重は童子訓について、「武士の家では、その本

を持たない家はなかった」また、「童子訓は子供を寝かせるとき、子守歌様に誦しつつ、寝させたものであります。それでも、私も父から童子訓を習い、七歳の時に暗唱出来ましたときは、非常に学者になった様な心地が致しました。」と語っています。これは、全家臣の心得ひとつとして配布されました。おそらく各家庭における女子教育にも役立てる配慮だったと思われます。

親として子供に生きる基本を教えるには、親自身がまず人間として生まれ、生き、死ぬ、とはどういうことかを自ら認識しなければなりません。「日新館童子訓」は、そのことを改めて考えさせて教えてくれる、親のための教科書でもあったのです。



日新館童子訓

会津藩では、「什」という六歳から九歳までの藩士の男児たちの組（班）がありました。什には、子供同士で遊び交わることで、友情や思いやり、親しさとなれなれしさの違いなど、社会人として身に付けるべき基本を自然に学ばせる目的がありました。什では、まず近所の十人前後の遊び仲間が組を組織し、年長者が組長となって仲間をまとめます。ここでは、地位や石高など家の格は関係ありません。

子供たちは、午前中はそれぞれ寺子屋に行ったり、師匠について読み書きを習ったりしています。午後になると、持ち回りで当番となる家に皆が集合します。集まってくると、お互いにあいさつをします。上下関係、先輩後輩関係には、明確な決まりがあります。そして、全員が集まると、正座して並び始まります。什には、掟があります。組長が「什の掟」を暗唱します。一条暗唱するごとに聞いている子たちは、「はい」と言ってお辞儀をし

ます。そして最後には、皆で「ならぬことはならぬものです。」と唱和します。これが有名な会津藩士の基本、「ならぬことはならぬ」の精神です。これらを四年間「ならぬことはならぬものです」と、理屈抜きで武士の心得を叩き込まれます。暗唱が終わったら、組長は全員に向かって「昨日から今日までの間に掟をそむいた者はおらぬか」と尋ね、そむいた者がいれば本人に問いただし、それが事実なら罰則を与えます。罰則とは量刑の軽い順に、「無念でありました」と言っただけに詫げる、「しっぺ」と言っただけで相手の甲を打つ、などがありました。一番重い罰則は、「絶交」あるいは「派切り」でした。そうになると、親が付き添って仲間の家を一軒一軒回り、全員が許してくれるまで誰からも口をきいてもらえません。仲間からの叱責には更生を促す大きな効果があったのではないのでしょうか。

その話が終われば、全員が戸外に出て、かけっこや鬼ごっこなど夕暮れまで遊びます。什の組は、日新館に入学後もそのまま持ち上がりました、ですから、他の組に負けてはいけなないと考え、もっと自らを磨き、また他の組と競い合うことで切磋琢磨させていたのでしょう。これが結束力を生んだともいえます。

【家庭でのしつけ】

日新館が開講された二年後に「幼年者心得之廉書」をすべての藩士の家庭に配りました。これは、「日新館童子訓」の一部を幼い子どもたちのしつけ用に平易にしたものです。男子には、日新館で教育を受けられますが、女子は、教育を受ける機会はなく、家庭教育がすべてでした。それでも彼女たちはいずれ母親になり、子供たちを立派な人間としてまた立派な藩士として育てなければなりません。ですから、会津では男女を問わず、家庭におけるしつけが重要であると考え「幼年者心得之廉書」をつくったのです。それは十七カ条ありました。これらをすべて守らせるのは難しいものですが、このおおもとは長幼の序、つまり年長者を敬い、自らを心身共に正しく端正に保つ心に集約されています。こうした基本を守ることの大切さを染み込ませていたのでしょう。

会津藩の武家の母親たちは、「幼年者心得之廉書」を幼年教育の指針とし、そのような母親たちの家庭教育があって初めて会津藩の教育水準の高さが維持されたのだと考えられずにはられません。

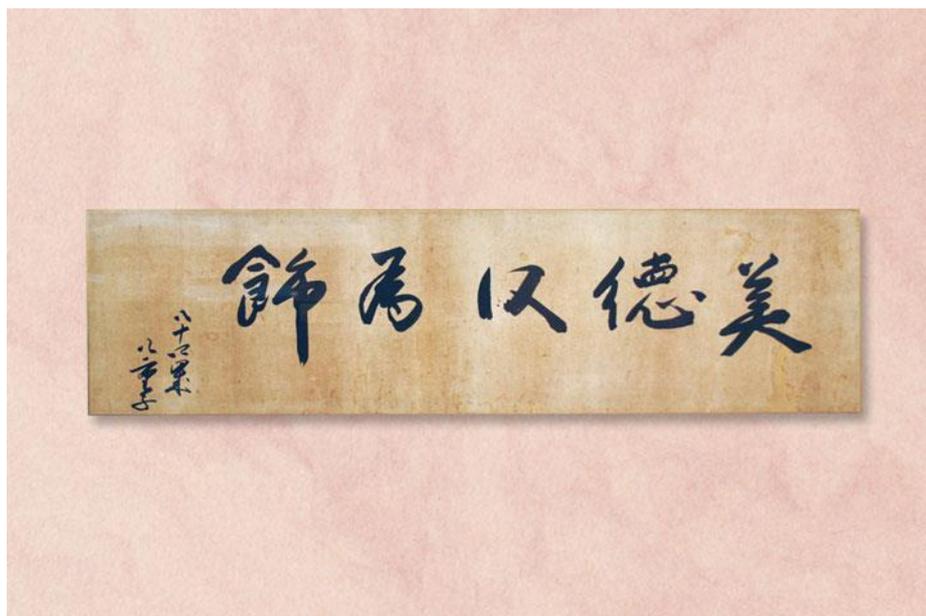
また武士の心得のひとつとして、六歳になれば「死ぬ覚悟」についても教わります。男児は、仏壇の前で「切腹の稽古」を行います。女兒もいざという時、辱めを受ける前に潔く自刃するのが武家の女性であるとして、母親から自刃の仕方を教わりました。嫁ぐときには父親から懐剣を渡されました。護身ため、そして主君や我が子の身を守り、いざというときには誇りを持って自刃できるように差していたのです。八重も最後を迎えるとき時まで、武家の女性として、常に懐剣を身に着けていました。死ぬ覚悟は生きる覚悟と同

義語です。立派な死は突然もたらせるものではありません。死が生の延長であれば、立派な死に対するには立派な生がなければなりません。切腹の儀式を学ぶことも、嫁ぐ時に懐剣を渡されるのも、大前提として、自らに恥じない立派な生を完うするためでした。

私たちの指針】

このような環境の中で育った八重は、勇婦としての働きぶり、他人から揶揄され続けても貫いた新しい生き方、篤志看護婦として従軍し我が身を顧みず奉仕に努めた仕事ぶりなどから、「凛々しくある事」「自分が正しいと思ったら貫く生き方」を実践していたといえます。これらは、私たちが今こそ見習いたい「日本人の生き方」のひとつではないでしょうか。

最後に、八重が亡くなる直前に郷里のある学校で書を残しました。それが、「美德を以て飾りと為す」です。これは、「内面の美德があれば他に何も飾りはいらぬ」ということです。



新島八重の書

以上